

## 佐喜真美術館オープン!

館主 佐喜真道夫氏に聞く

佐喜真美術館のオープンを間近に控え、忙しく動き回る館主の佐喜真道夫さん。絵との出会いから、美術館を完成させるまでのさまざまな出来事について聞いてみた。

G: 佐喜真さんと絵画の出会いについて聞かせて下さい。

佐喜真: 僕の父が絵が好きでね。幼い頃から展示会を見に連れて行ってもらっていました。これが絵との出会いだったと思います。それともうひとつは、母親の死ですね。中学校2年の時で末っ子だったもんだからすごく寂しくてね。父親も同じように寂しかったんだと思います。弥勒菩薩のデブリカを買ってきて仏壇の横に置きました。寂しくなると仏壇の母の写真や、弥勒菩薩を眺めていました。あるとき弥勒菩薩を眺めていたら不思議な体験をしたんです。心の中に凍りついていた何かが溶けていくような何とも言えない体験でした。これをきっかけにして仏像が好きになってね。美術全集の仏像を毎日眺めてましたね。造形が精神に与える力でしょうか。

G: 中学生の時の不思議な体験や展示会巡りが原点となって、現在の佐喜真美術館と結びついているわけですね。いつ頃からコレクションを始められたのですか。

佐喜真: 1972年から軍用地料が入ってきて、それが絵に化けたわけです。軍用地料を意味のある形にしたかったんです。生活は針灸の仕事で何とかありますからね。

G: 主なコレクションでは丸木位里・俊の作品がありますね。「原

爆の図」では知られていますが、「沖縄戦の図」やほかの作品に関してもあまり知られていない作家ですよね。

佐喜真: あまりにも「原爆の図」が有名になりすぎてね。精力的にいろんな絵を描いていらっしゃる方なんです。戦前から水墨画の前衛的な作家で、若手の作家にも影響を与えた人なんです。郷里の広島で原爆を見てしまったことで、「原爆の図」を描いた。その延長上で沖縄戦も描かれたわけです。基本は優れた水墨画があってこそ

予感がありました。それが美術館を作ろうと思ったきっかけでしょうね。集め始めたのは30才の頃からです。(佐喜真さん現在48才)

美術館を作るというのは夢みたいな話だと思っていたんですが、軍用地料が入ってきたこと、僕の先祖が残してくれた土地があったこと、丸木先生や上野先生との出会い、偶然が重なりあって実現した感じですね。念じ続けることの大事さを今実感しています。僕の場合、10年間念じ続けたわけです。

G: 美術館の場所については  
佐喜真: 沖縄のあちこちを探し回りました。コレクションの内容が厳しいので、建てる条件として、  
1. 緑があること。2. 近くに拝所かお墓があること(それがあ



「佐喜真美術館」

宜野湾市上原358 TEL 098(893)5737

だだと思います。美術館に丸木先生の「沖縄戦の図」が展示されますが反戦とか、平和とかではなく、芸術を鑑賞してもらおう美術館であり、お寺であり、しっかり物事を考える場にしたいです。

G: 美術館を作りたいと思われたのはなぜでしょうか。

佐喜真: 僕が始めてコレクションしたのは上野誠さんの長崎の「被爆した男」という作品で、とても強烈な印象を受けました。その作品は茶の間に掛けて楽しむ作品ではないので、集めていけば将来なにかできるかなという漠然とした

ことで現実から精神を移すことが出来ますから) 3. 海が見える場所(鑑賞した後の激しい心の揺れを帰っていける場所)。この3つの条件がそろった場所で探してもらったんです。でもバブルのころで、土地の値段も高くて手が出せない状況でした。5年間挫折の連続で、最後に軍用地を返還してもらうことにしたんです。その交渉でも3年かかりました。完成してみても先祖様のいるこの土地に作って、本当によかったと思っています。(1994. 11. 19. 画廊沖縄にてインタビュー)

忠孝酒造

—よりよいお酒づくりガターマです—

### 眠れる壺の美酒



画材

陶芸用品

額縁制作

3F: 画材フロア

CULTURE PLAZA  
藝みつや書店  
〒902 沖縄県那覇市泉崎1-1-3 ☎(098) 863-1650  
ファクシミリ(098) 861-0315

留学を終えて

# アメリカ美術の捉え直し

——マイノリティーの増大——

## 《アメリカ留学》

G: どのようなきっかけでアメリカに行くことになったんですか。

翁長: 国外留学(学芸員)については知っていて行きたいと思っていましたね。それで10年前に試験を受けたんですが、見事に落ちしまったんです。そして39才になって思いついたときには年齢制限が40才までということであきらめていたんですが、推薦で行けることになったわけです。

G: 沖縄から何人行かれたんですか。

翁長: 二人です。二人ともワシントンD・Cにある、ジョージワシントン大学のミュージアム学(博物館、美術館学)で1年間学びました。大学での講義は同じ美術館学、博物館学(museum studies)インターンではそれぞれ自然史博物館、美術館でやった訳です。ミュージアム学は専門的に別れているんです。それを大学のアドバイザーにどこに行ったらいいのか相談をして決めました。インターンについては僕の場合は沖縄の美術館の規模について話して小さな美術館を選びました。そこでは美術館の全てを教えてくれるんです。学科の方はマネージメント、展示、コレクション管理リサーチを学びました。最初に取ったのは展示デザインと博物館学入門、展示におけるキュレーター、美術館の仕事についてと、美術館の教育についてです。

## 《美術教育》

G: 美術館の役割のひとつとして教育というのに入っているんです

ね。

翁長: アメリカの美術館教育はものすごく充実しています。アメリカミュージアム協会のミュージアム規定というのは「美術館とは専門のスタッフがいて美的な教育を要するところで、コレクションの管理と研究、一定期間の展示をするところである。」という訳です。

アメリカ美術館の創始者はアメリカはヨーロッパとは違うところから発想をしていくところで、アメリカには何もないわけです。そこで必要なのは教育の機能が大きいだろうということで取り入れていったわけです。展示というのも教育の一部なんです。

G: 教育に重きを置くところがアメリカの特徴かもしれませんね。

翁長: そういう意味ではヨーロッパとは全然違ってきます。ヨーロッパ型の美術館では貴族のコレクションがあって管理しつつ、だんだん公衆に展示していくことで、どちらかと言えばコレクション管理に膨大に随分労力と金をつぎ込んでいます。アメリカでは最初から大衆に還元する要素が強かったそれが教育ということでしょう。

G: それからすると美術館の持っている機能性のひとつ、教育面にウエイトを置くということは国民を啓蒙する感じがするし、ある意味では美術の自由な解釈というか美術の独立性みたいなところからすると、少し違う感じがするんですが…。

翁長: そこら辺はいつも問題になってくるところなんです。アメリカ的な教育システムが大衆を啓蒙するところや美術を広げるといふ面はすごく良いと思うんですが、

美術の審美的な面からすると反発があるわけです。タイトルにしてもサービス過剰だとか、啓蒙はいんだけれど首をかしげるとこはありますね。

## 《美術館と市民との関係》

G: 国の歴史が浅いということでヨーロッパに追いつけ、追い越せというニュアンスがあり対抗しようとする意識が一因しているのかも知れませんね。

留学したいきさつや、その他美術館の特徴などについてお話しして頂いたわけですが、1年間の留学を終えて沖縄に帰ってきて、改めて学芸員の仕事や美術館と市民との関係を含めてどのような印象を受けたのか、聞かせていただけないでしょうか。

翁長: 学芸員という仕事はアメリカにおいては全然こちらとは違うことですね。かなり市民に定着しつつあり、それぞれが非常に深い学識が要求されます。アメリカで学んだ事は大きいと思います。

市民に対する美術館のあり方では、啓蒙思想の良い点、悪い点があると思いますが、ある意味では啓蒙思想のようなものも必要だと思うんです。美術館は一体何のために作るのか、その理念をはっきりさせる事とか、誰が利益を得るのか、行政なのか、市民なのか、それを作る前に明示しないとイケないでしょう。

毎年アメリカ博物館学協会から「倫理規定」というのが出されるんですが、その中で「美術館、博物館は公共の財産の執事である」と言っています。公衆のためにあるわけです。その点では徹底して

郷土の損害保険会社

# 大同火災

〒900 那覇市久米2-2-20 TEL867-116(代表)

國場組グループ

# 國和會

会長 國場 幸治

いますね。日本の場合には権威主義的な発想から作る場合が多いですからね。

### 《学芸員の仕事》

G：基本的に民主主義の概念があるような感じですね。日本の美術館を作る場合には、行政主導型のプレゼンテーションみたいなことはアメリカではあり得ないんですね。民間主導で進めていくことの方が多いいんですか。

翁長：スミソニアン美術館の場合は特別でしょうね。公立の美術館でアメリカのほとんどの美術館の残りは補助を受けています。学芸員の場合は専門分科されていて自分の仕事を研究することができます。アメリカではキュレーターになるためには、大学院で学芸員学を学ぶこと、美術館での経験、展示会を積むことで、アシスタント

キュレーターからアソシエイトキュレーターになり、やっとキュレーターになれるわけです。キュレーターはコレクターとのつながりや、どこにどんな作品があるのかわかっておかなければならないし、大きな展示会をする場合にはマネジメントなどもしなければならなりません。それに関わる人達をまとめること3年企画、4年企画、5年企画のなかで、民間のプレーンも交えて十分に打ち合わせをしていくわけですね。

G：日本の国公立美術館の場合は館内のキュレーターが企画を進めていくのが普通ですよ。アメリカの場合は外部のプレーンも入れて長い時間をかけて企画を作っていくわけですね。日本ではインディペンデントキュレーターが外部で独立した形で、美術館で企画をすることは難しい状況があると聞いていますが、アメリカでは可能なわけですね。ところで、ワシントンでの1年間の生活はどうでしたか。

### 《ワシントンでの生活》

翁長：初めの1か月半は一人で生活して、その後家族と合流したんです。息子はそこの小学校に通わせました。英語は話せないんですが、彼なりに対応の仕方を身につけてましたね。

そこの小学校は1クラス18名なんですが、3人の先生がいるんです。目の不自由な生徒が一人いてその生徒のための先生と、アシスタントと正式な先生の3人です。

目の不自由な生徒がいることで点字をみんなで回して見たり、座る席は自由だし、幼稚園生と一緒にのクラスなんです。クラスの8割がヒスパニック系なんです。そんな中で1年間過ごしてきて相手のいることは理解できるようになりました。

G：奥さんの方はどうされていたんですか。

翁長：彼女はジョージ・ワシントン大学とアメリカンユニバーシテ

ィーで単位を取りました。

最初EFLというクラスがあって、各国からの留学生の英語のクラスなんです。世界中あらゆるところから来ていて、僕のクラスでは南米、アラビア、台湾、インドネシア、アフリカ、韓国、イタリア、フランス等ですが、まったく異なる学科の人達で3か月間勉強したんです。彼らとの交流がものすごく面白かったですね。アジアがものすごく身近になった感じがします。

G：留学中危険な目にあつたとかエピソードはありますか。

翁長：それはなかったですね。8年前はパスポートを取られたり大変でしたけれど、今回は無事過ぎるくらい危険な目には遭いませんでした。英語の個人教授にワシントンの一番貧しい場所に連れてってもらったくらいです。あまりの悲惨さにカメラを向けることができませんでした。そこは美術館から1キロ程しか離れていないんですが、そういう地域があることは驚きでした。貧民の救済のための保護施策をやっているから南部の方からどんどん集まってくるんです。

2020年にはヒスパニック系が黒人を抑えてマイノリティーの第1番目にくるんですよ。そういう意味では美術館も変わらざるをえないし、ここ20年間でだいぶ変わってきていますよ。

### 《たてまえの民主主義国家》

G：1年間も生活するといろいろとあらが見えてくるでしょうね。

翁長：生活面では全然心配なかったです。私たちが住んでいたアパートはワシントンでも初期のころにできたかなり大きな建物で4棟あって、1棟に1500人程が住んでいるんです。セキュリティもしっかりしているし、プールやサウナ、エクササイズ、映画館もついています。そこは、移民の方も多く住んでいるんですが、おもしろいことに日本人はまったく見えなくて



翁長 直樹 (初出 雑誌)

1951年 沖縄県具志川生まれ  
大阪教育大学英語科入学。  
映画研究の末中退。  
琉球大学美術工芸科に入学。  
映画研究会にて映画制作上映。  
1978~1982年まで東京芸大、  
和光大学にて美術史の聴講を  
受け、現代美術の研究に入る。  
1993~1994年まで沖縄県人材育  
成財団の留学生としてジョージ  
ワシントン大学に留学。  
現在、開邦高校美術教諭



ひとにいつも新しく一生活共感企業

りゅうせき

本社：沖縄県浦添市西洲2-2-3 〒901-21  
TEL 098-675-5000 FAX 098-675-0270

地元のビールが断然うまい  
最も新鮮

オリオンビール

ず。ちゃんと住んでいるんですよ。パーティーや催し物にも出席しない、交流がないんです。

G: 移民や黒人に対しての差別があるんでしょうか。

翁長: 日本人は白人に対してのコンプレックス、他の人種には蔑視のようなものがあるようです。それと、他の人種の差別に関して言えば、日常的には都会にないけれど、周囲に行くともまだあるみたいですね。でも、美術館や博物館のキュレーターは黒人やヒスパニック系になるにはとても難しいですよ。

G: 差別というのはまだまだ根深いんですね。

翁長: ただおもしろいのはアメリカという社会はたてまえが社会を支配しているから、本音では差別

言います。ブラックといったら人種差別になってしまうわけです。でも、実際は差別しているのですだから、差別意識はものすごくあります。ホワイトカラー同志でもお互いを監視し合って、仲間かどうか判断するわけです。立ち居振舞とか服装とか。一見民主主義的なんだけれど、内実は差別に拘束されているんです。

G: わかるような気がしますね。アメリカのハッピーエンドで終わる映画を見ていると絶対に矛盾を抱えては終わらないでしょう。常に正当化していくでしょう。

翁長: 煙草の話なんかとてもおもしろいですよ。禁煙法ができるんじゃないかという気がするくらいですよ。僕の住んでいた周辺では半年くらいでカフェとか、ビルの

では飲まないし、仕事が終われば家に直行ですからね。文学者とか落ちこぼれた人達はどこで過ごしているのか不思議ですね。気軽な一杯飲み屋みたいなのがなくなってしまったわけですからね。

◆◆ ◆◆

G: 留学されて学芸員の勉強もしながらあちこちの画廊や美術館を回っているいろいろな作品も見たと思います。以前、沖縄にいたときのアメリカの美術の解釈は留学を通してどのように変わったのか、それとも変わらなかったのか聞かせて下さい。

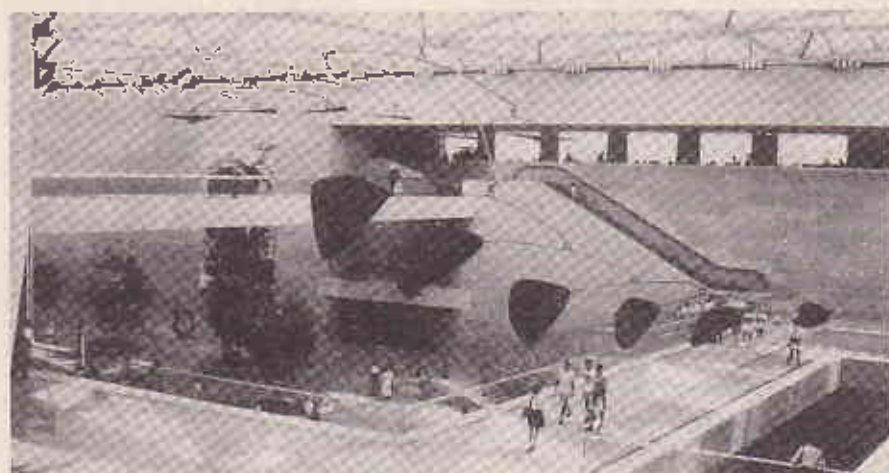
翁長: 8年前に行った美術館の体験と今回違うのは、美術館の仕事に関わるかもしれないという心づもりがあって、展示の仕方や美術館の作りなどを意識して美術館を見て回りました。感じたことは美術館にかかる予算があること、美術館で現代美術を捉えながらやっていくことができるというのは美術を社会的なレベルで交流させる基盤になっていることだと思います。それから新人の作家の個展を企画したり、企画展はけっこう充実していますよ。

G: 企画の傾向としてはどうなのでしょう。コンセプチュアルアートやミニマルアートがある種の閉塞状態にあると思うのですが、風穴をあけるための企画などがあるんでしょうか。それとも閉塞していないという自覚なのか…。

翁長: 閉塞状況だと思いますよ。その代わり別の方面に進んでいる感じはしますよ。パブリックアート、フェミニズムアート、ラテン系の作家たちを紹介したり、それらが美術の大きな流れだから現代美術の新しい流れはちょっと見えないですけどね。

G: マイノリティーの文化にスポットがあてることで突破口を開こうとしているわけですね。

翁長: ハーシュホーン美術館でやっていたのはゴンザレス・トーレスというラテン系の作家なんです。彼は完全なインスクリプション



ナショナルギャラリー EAST ロビー、カルダールの彫刻

していても、表向きは平等という方向に移行していく現実があるわけですね。その辺が民主主義国家という感じがしますね。

G: 理念やたてまえで民衆を引っ張っていく社会構造があるわけですね。

翁長: アメリカの道徳というのは中流より上のホワイトカラーが規定しているんですけど、これは非常に欺瞞的な道徳だと知識人から非難されているんです。たてまえでは動くんですけど、本音では動かないですよ。

今は黒人のことはブラックとは呼ばないで、アフロアメリカンと

中での喫煙場所がなくなりましたよ。僕がいつもいっていたお店なんです。そこはブアーホワイトやヒスパニック系とかたむろしていたところなんです。その人たちはそこで煙草を吸って、ビールを飲みにくるんです。そこは、日本的に言えばスナックみたいな場所なんです。その人達が3か月足らずでなくなってしまいましたね。原因は煙草なんです。禁煙にするとお酒を飲まなくなるからきれいになるわけですよ。

G: ある種の人生に落ちこぼれた人達のいき場所がなくなりますね

翁長: 実際アメリカ人はお酒を外

●展示会用の額縁リースも承ります

額縁・掛軸の専門店

前田額装商会

〒900 那覇市松尾 2-7-29

TEL 098 (867) 4811  
FAX 098 (861) 0367

ンの作品なんです。もうひとつは  
ジェーン・ダーニングの完璧なフ  
ェミニズムアートをやっているん  
です。ラテン系をキュレーターに入  
れるための枠を作る話もあるん  
ですよ。もうひとつには抽象表現主  
義の捉え直しがあると思います。

### 《アメリカ美術の捉え直し》

G: 1950年代アメリカの抽象  
表現主義を、アメリカ自身が捉え  
直そうという動きと、アメリカに  
住んでいる人達のマイノリティー  
の文化をすくい上げようとする動  
きが見られるわけですか？

翁長: アメリカ自身の捉え直しの  
時代のような感じがします。

G: 世界的にも問い直す感じがし  
ていたのですが、アメリカでも同  
じような状況があるわけですね。  
その中で日本の美術、アジアの美  
術、アメリカを除く美術に対する  
関心はどうなんでしょうか。

翁長: 美術館でアジアの美術を捉  
え直す大きな動きはない感じが  
します。美術雑誌においては韓国、  
台湾、中国の現代美術の特集をか  
なり組んでいますけど。地道な活動  
としてはアジア美術のワークショ  
ップで書道の教室をしたり、意外  
に浮世絵など日本美術に関心が高  
い人が多いですね。これはまだ現  
代美術までには至っていないです  
けどね。

マイノリティーの第1番目にく  
るのがヒスパニック系、次にアジ  
ア系、の増大によって文化的に与  
える影響も大きいと思います。

G: アメリカの美術の流れがひと  
つの閉塞に向かっていることを短  
絡的に考えることよりも、アメリ  
カという社会の構造自体がアジア  
系を含むヨーロッパ系がすべてを  
握っていた時代から、世界の人種  
のつぼというアメリカができつ  
つある。そこからつき上げられて  
きたという可能性も考えなければ  
ならないわけですね。

翁長: ヨーロッパの美術の流れは  
根強いものがあって、そう簡単に  
変わるという可能性は考えられな

いと思いますけれど、

G: ヨーロッパを除く他の国々と  
アメリカとの関係について話して  
きたんですが、ヨーロッパに対す  
る美術の関心はどうなんでしょう  
か。

翁長: ほとんどヨーロッパコンブ  
レックスは変わらず続いていると  
見て良いでしょうが、アメリカが  
やや動乱気味のためにひと前より  
ヨーロッパ志向になりつつあるか  
もしれません。

G: 日本の美術雑誌のよれば日本  
やアメリカ、ヨーロッパの美術マ  
ーケットではアメリカの美術の人  
気がなくなってきていて、アジア  
オセアニア地区や東ヨーロッパの  
社会性の強い美術の人氣がでてき  
ている。マーケットにおける美術  
の軸がアメリカからヨーロッパや  
アジアに移った感じがするんです  
が…。

翁長: アメリカの内部で、異人種  
から吸収することで何かを生みだ  
そうとするとか、ハーシュホーン  
美術館が最近購入したのがラテン  
系、ヒスパニック系、アジア系の  
作家の作品なんです。

G: アメリカの美術館はのどのよ  
うな運営になっているのでしょうか。

翁長: 参考になるとすれば、アメリ  
カでは美術館が社会の中に根付  
いていることですね。それは美術  
館だけではなく、地域にアートセ  
ンターがあってそれは非営利団体  
が市や県の援助で運営されている  
ものなんです。古い高校を利用し  
たワークショップ等もあって、美  
術や音楽の教室を無料で貸し、作  
家は生徒に教え、月謝をもらい作  
品を売ることができるシステムが  
あるんです。それから市民団体に  
よる素人作家のオークションも開  
かれたりするんです。地域のいろ  
いろ活動があって美術館があるわ  
けです。だから美術館だけ作って  
も意味がないと思うんです。

G: かなり生活に密着した形で運  
営されているんですね。沖縄では

これから美術館作りが進んでいく  
わけですが、建物や、コレクション  
の管理、組織、学芸員の問題など  
さまざまな問題を抱えていると  
ころなんです。

翁長: 今までの蓄積もないし、他  
の例も県内にはなく、ノウハウも  
ないので大変ですが、県の学芸員  
制度はどんどん活かしてほしいで  
す。それと研究できる十分な時間  
を与えてほしいですね。せめて2  
年くらいはほしい。

美術館のコンセプト作りをしっ  
かりさせて走りださないと大変な  
ことになると思うんですが、

G: アメリカの学芸員の層が厚い  
というお話を聞いたんですが、そ  
こまで持っていくには相当な時間  
がかかるということですね。

G: 最後に沖縄の作家たちに言え  
ることはありますか。

翁長: もっと社会的メッセージの  
ある作品も必要だということだ  
作家が純粋美術だけをやっている  
というのは不健康だと思うんです  
例えば、大きな米軍の基地を抱え  
ているにもかかわらず、それをメ  
ッセージに折り込んだ作品を作ら  
ないのかということです。そうい  
う作品を作り、越えていくことで  
みえてくるような感じがするん  
ですが、「美術」という  
あるいは「絵画」という抑圧的制  
度にマヒして、全く骨抜き  
のサロン絵画になるより、ストレートな  
メッセージがまだましだとい  
うことです。もっと自由な、あるいは  
絵画の抑圧的な格闘する作品があ  
っても良いはず。なにも美術家は  
美術だけをやっているわけでもない。  
あらゆる顔が一人の作家にある  
はずです。

もうひとつは対本土ではなく直接、  
海外に向かっていくことですね。  
そのためにも美術館の必要性  
を感じますし、基盤作りもしなけ  
ればならないでしょう。

G: 今日はどうも有り難うござい  
ました。

-1994. 10. 23. GALLERYWORK IIにて-

## GALLERY WORK- II

◇現代アートに開かれた空間◇

◆ 入場料 1日 1万円(1週間単位) ◆

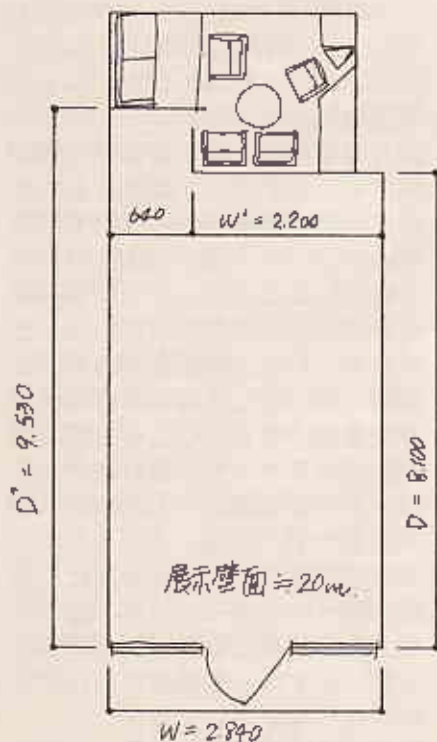
／基礎から学ぶ／

●絵画 ●デザイン・工芸 ●彫刻 ●西洋美術 ●版画 ●通信教育

芸大・美大 受講予備校 **沖縄美術アカデミー**

GALLERY WORK II  
貸 画 廊 案 内

- 期間：6日間（月～土）  
AM11:00～PM7:00  
※6日間単位として2週間の利用も可
- 使用料金：1日（1万円）  
※アシスタント付きの場合  
1日（1万8千円）
- 搬入・搬出：土曜日  
PM6:00より搬出  
PM7:00より搬入
- 原状回復：使用終了後は、備品等を現状に戻して下さい。  
（壁面に釘の使用可）
- 付属品：彫刻台10個  
（W35×D35×H80）  
スポットライト  
湯飲み道具等。
- DM（案内状）：DM作成費・DM郵送費は作家負担  
※DM作成費用・1000枚（3万円）  
（版下制作費・7千円込み）  
画廊にて版下を作成する場合の文字はワープロ文字  
※DM用写真は作家持ち込み
- 申込先（詳細）は下記までご連絡下さい。☎855-7933



（GALLERY WORK II 見取り図）

ギャラリーマン

美術と思想

レヴィストロースやフーコーといった名前は日常めったに聞かないものだが、過日パリに在住している作家の幸地学氏が個展のため米沖した際、市内の本屋さんを駆けずり回りやっとの事で見つけることができた。

文化人類学や、人文学科のコーナーでメモを手に一生涯命探す姿は、画家、彫刻家と言うより、思想家、学者に思える風体だった。

何でも最近の彼は現代思想の構造主義の作家や、ポスト構造主義のデリダやドゥルーズ、また現象学のフッサールやポンティの本を読み込んでいたとか。しかし、仏語の専門書は難しいので日本語訳の本が欲しかったと、十数冊を袋につめ込んだ。

彼の多重、多元、多様の作品を見ればなるほどどうなずけるような気がするが、彼の内面には思想哲学が充満している気がしてならない。

僕などはサルトルやカミュを青春時代に目を通しただけで、頭の中は実存主義でカチンカチンになっているから、彼と話すことは刺激的だ。

これもまた、過日の話になるのだが、30代～40代の美術関係の仲間が月1回集まって勉強会をやっている。その日は「ポストモダンをどう捉えるか」というのがテーマだった。基調スピーチをやった安座間氏のモダニズムの定義やポストモダニズムの現状と解釈は、日頃のおさらいと同時に、僕の勉強不足を痛感して意義深いもので

あった。「作家は思想や哲学をもたないとダメだよ」と「ボッ」と彼がもらった事がヤサ！という感じで心に残った。

現代美術の流れの中で、モダニズム（近代主義）の閉塞感や、ヨーロッパの理念中心主義の構造に対する批判が強まっている。このポストモダンの現状はイズムか次なるイズムの前ぶれとしてのカオスか、勉強会の話でも結論は出せなかった。

いずれにしても、現代美術と現代思想が深く関係し、連動していることは明白である。70年以降の美術シーンはたえず今日性を重視した思想展開を試みて来ていることが分かる。世紀末の今日になって、二千年にもおよぶヨーロッパの形而上学的な世界観や理論的な秩序体系を、ヨーロッパの知性が批判の手をゆるめないのが興味深い。（上）

編集デスク

今年も4回の発行を無事終えることが出来ました。広告掲載して下さる企業の皆様、読者の皆様に心から感謝申し上げます。

2000年の完成に向けて進められている沖縄県立現代美術館建設。ボイスの企画でもさまざまな人達の意見を聞く事ができました。読者からは美術館建設に対して疑問符入りの意見を頂いたりもしましたが、走り始めた以上美術館建設の動きに注目していきたい。

まだ不況の風は吹いていますがその風向きは景気回復の方向に向かっていることを願い、1995年も美術界の先端をいく内容でギャラリーボイスを発行していきたいと思っています。（当間）



絵画の専門店  
画廊 沖 縄  
〒000 沖縄県那覇市泉崎2-2-3  
TEL 098813416760  
FAX 098815517930

WANTED!  
あなたの広告を待っています  
本紙 サ・ギャラリーボイス ☎098(855)7933